

---

# ステラになってSAOで大暴れ！

メア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ステラになつてSAOで大暴れ！

### 【Nコード】

N2266Z

### 【作者名】

メア

### 【あらすじ】

ソードアート・オンライン（Sword Art Online）の世界に神から頂いた、叡智を持って転生したボクは、叡智を使いSAOを楽しもうとしたら、父親が銀行強盗をして、幼い少女に殺されてしまった。

しかも、殺した幼い少女の家に引き取られて住む事になりました。

これはどうにかしないとイケないっ！

そして、ボクの容姿がブラックロックシューターのステラってなの

に男って何!?

ヒロインはシノンとシリカが確定。

テイルズキャラも出てきます。

原作崩壊があると思います。

この小説は出来る限り、アインクラッドの75層まで行こうと思っています。

## ソードアート・オンライン(Sword Art Online)?

皆様、はじめまして。ボクは朝田錬(旧姓篠原)というしが無いソードアート・オンライン(Sword Art Online)に転生した男の転生者です。

現在の家族構成は、祖父母と母、妹……………ちなみに、全部義理だよ。

はい、お気づきの方はいますが、転生先からして、妹はシノンこと朝田詩乃。

詩乃との係わりは簡単で、詩乃が殺した銀行強盗犯の息子がボクなんだ。そして、本来ならたらい回しにされたあげく、施設に送られるはずのボクを詩乃の祖父母は、責任から分からないけど、ボクを引き取ってくれたんだ。

最初こそ、詩乃は心を閉ざしていたけど、小学生のころから嫌われながらもずっと詩乃の側にいて、支えながら詩乃の為にいろんな事(外敵排除や身代わり)を二年間していたら、中学生にあがった時くらいから、心を開いてくれるようになった。

詩乃が心を開いてくれた後、転生特典の知識を利用して、義理の母に催眠術の暗示やカウンセリングを施して、元の正常な精神状態にしてあげると、詩乃の好感度はMAXになったみたいだよ。

それから詩乃は、好意と父親を殺した罪悪感からか、逆にボクに尽くしてくれるようになった。

むしろ、依存の領域に入っているよ……………だって、中学生になっ

ても一緒に寝たり、お風呂入ったりと詩乃はトイレ以外、常に一緒にいるから……………ちよつ、物投げないで、リア充死ねとか言わないで！

「お兄ちゃん、気持ちいい？」

「うん、いつもありがとう」

「気にしないで」

今は、一緒に風呂に入って揚がった後、自室のカーペットに座って、長い髪を詩乃にドライヤーで乾かしてもらいながら、髪の毛のケアをしてもらっているんだよ。

「よし、完成……………うん、完璧」

「いつもの通り？」

「うん、お兄ちゃんはいつも通り綺麗だよ」

「そう……………」

そう、ボクの問題点のひとつは容姿だ。容姿端麗なので普通なら問題無いんだ……………女性ならだけだね。

神様は何をとち狂ったのか、ボクの容姿はブラックロック シューター THE GAMEの主人公ステラにそっくりなんだ。街を歩けばほぼナンパされるから困り者だよ……………本当にね。

「さて、ボクはいつも通りにパソコンを使うけど、詩乃はどうする？」

「私もいつも通り勉強かな」

「分かった」

詩乃がその辺にある本を取って、ボクの背中に自分の背中を合わせて座り、重力や風力などの本を読んで詳しく勉強しだした。

これは、当然、ボクの差し金だよ。

ボクはパソコンに向かって作りかけの薬のデータを開く。

ボクが作っている薬はHIVとAIDSの特効薬……………つまり、

《絶剣》ユウキこと紺野木綿季とその姉を救う為だ。

なぜ、ボクがこんな物を作るかと言うと、神様からいつの間にか貰っていた特典が様々な事についての叡智だ。

強化系ですら無いから肉体的には辛いかもしれないけど、ユウキさん達を救えるなら“いいや”と思ったよ。

「よし、出来た〜」

「お兄ちゃん、何が出来たの？」

「HIV……………ヒト免疫不全ウイルスの特効薬とAIDS……………」

…後天性免疫不全症候群の特効薬のデータだよ」

「……………簡単に言ってるけど、それって凄い事だからね？」

「あははは」

ボクの叡智はその事に深く考え続けると、様々な情報が浮かんで来るから、それを整理して組み合わせることができるんだよ。

「お金にだって不自由してないのに……………」

「まあまあ、気にしたら負けだよ」

携帯を取り出して、義母に電話をする。

ちなみに、詩乃とボクは都会の中学に進学したので、二人暮らしだよ。

『二人とも元気？』

「うん、元気だよ」

「こっちは問題無いよ、母さん」

しばらく、お互いの近況報告をしてから本題に入る。

「義母さん、これの特許と実物を作って紺野って人達に無料で投与して」

『知り合い？』

「父さんの知り合いの子供さん」

二人共、複雑な表情をしたけど特に問題は無いはずだよ。

『まあ、鍊のお陰で私はアーガスの社長になったけどね』

ちよつ、それ死亡フラグじゃないですかっ!?

「おめでとっ」

『詩乃、ありがとう』

「義母さん、とりあえずおめでとつ。頼んでおいた製薬会社の買収はどうなった？」

『当然、必要そうなのは何かから何まで全部押さえたわよ。その代わり、OSで稼いだお金も三割消えたけど。こっちは個人経営にしてあるからやりたいように出来るわ』

OSは引き取られてから、即座に作ってネット場で販売したら、世界中で馬鹿売れしたよ

さすが一世代先の技術です。さらに、次の年に新しいOSでしたら、またまた馬鹿売れだったので、個人資産が国家予算個人国家並になったから、義母さん達にお金を沢山渡したんだけど、いつのまにかアーガスの社長ですか……………やばいよね。

「じゃあ、この薬達を作って臨床試験通ったら、いつもの通り販売よろしくね。ボクの事は秘匿でお願い」

『任せて。そうだ、茅場晶彦って知ってる？』

「知ってるよソードアート・オンライン（Sword Art Online）を作ってる人だよな？」

『ええ。貴方に技術協力を頼みたいそうよ。どうする？』

これはボクの計画を発動させるチャンスじゃないか……………ふふ、楽しくなって来たよ。

「条件飲んだらいいって言うておいて」

『了解。じゃあ、データは明日か明後日にでもアーガスに持って来て………秘書が五月蠅いから、そろそろ切るわね。後、夜更かしとエッチは程々に………でも、孫は早めによろしくね』

「……………」

最後に爆弾発言を残して言った義母さんのせいで、気まずい雰囲気になっちゃったや。

「お兄ちゃん……………」

顔を真っ赤にして照れている詩乃は可愛いと思う。

「エッチする？」

「ぶっ！」

詩乃からも投下された爆弾発言に、ドキドキが泊まらないよ。

「私はお兄ちゃんになら、いいよ？ そっじゃなきや、一緒に寝たり、お風呂に入ったりしないから……………むしろ、ウエルカム？」  
「そんな事を言いながら、迫って来る詩乃にボクの理性は……………  
「するか……………アツサリと敗北しました。  
やりたいざかりの中学生には耐えられません。

だから、詩乃をお姫様抱っこして、ベットに連れていきました。

次の日、学校帰りの制服のままアーガスの研究室へと向かいました。

ちなみに、昨日は詩乃の身体を開発するだけで終わったよ。決してヘタレじゃ無いんだから！

詩乃の身体の事を考えたら仕方ないんだよ。

「はい、お兄ちゃん。入館証」

「ありがとう、詩乃」

詩乃が受け取って来てくれた入館証を持って、何個もの嚴重なゲートを潜って研究室に着いたら、20代の男性が迎え入れてくれた。

「君が社長の言っていた開発者かい？」

「そうです」

「私は茅場晶彦、ソードアート・オンライン（Sword Art Online）の開発を担当している」

「ボクは朝田錬、こっちは妹の詩乃」

詩乃は会釈だけして、直ぐにボクの後ろに控える。

ボクの秘書みたいな感じだね。

「わざわざご足労頂いて、すまないね」

「いえ、ついでのなのでお気になさらないください。それに、協力は条件次第ですから」

「分かった。それで、条件はなんだい？」

「まず1個目は、ボク達をSAOのテストと本サービスに参加させて欲しい」

「……………いいだろう」

茅場晶彦はしばらく考えた後、許可をくれた。

「2個目は、武器に銃と弓、蛇剣を追加してくれ」

「おい……………」

「出来れば、狙撃銃がベストかな。3個目はサポートAIやテイマ―系を弄らせて」

「……………銃や弓を入れるのは、SAOでは無くなるから却下だ」

「いや、銃剣とか弓の外側を刃にすればいいんじゃないかな？」

ボクの狙いは、詩乃に狙撃銃を装備させる事だよ。

だって、シノンって言ったらヘカート？でしょう？  
異議は認めない。

「後、最後にオリジナルソードスキルシステムかな」

「ふむ……………」

「用件を飲んでくれるなら、資金援助の追加と技術提供は問題無い

」

「解った。条件を飲む代わりに、その作業はそちらでやってくれ。後は……………バランスについては難しくするぞ」

「銃の入手難度とかだね」

「ああ。銃弾も一発1000コルから5000コル辺りだな」

「凄くお金いるね……………」

「まあ、それぐらいじゃないとな」

確かに、反則だからね。

「お兄ちゃん、学校にはしばらく休むって連絡しといたよ」

「ありがとう」

それから、ボク達は三人で色々話して、内容を纏める。

「じゃあ、こっちが技術提供するの、サーバーやコンピュータでいいよね？」

「ああ。しかし、本当にこのスペックは出せるのか？」

「もちろんだよ。五感全てを実装しても、一切重くならない粒子コンピュータを発電機セットで提供するよ」

「では、細部まで徹底的に行う」

「うん。それじゃ、新たな世界を作ろうか」

「うむ」

「何か悪役みたいだよ、2人とも……………」

義母さんの所に行っていた、詩乃が帰ってきて、きつい一言を頂きました。

その後、ボク達はソードアート・オンライン（Sword Art Online）を改良していった。

## ソードアート・オンライン(Sword Art Online)?

月日が流れて、改造したソードアート・オンライン(Sword Art Online)が正式にオープンになったのでボク達も参加した。

ちなみに、多数の銃や様々な種類の武器を実装したし、装備の成長システムも突っ込んだ。

装備の成長システムは簡単で、一定経験値が貯まる 精錬する 一定確率で成功 装備が成長するという、遊び仕様だよ。

「オープン も問題無く終了したな」

そう、参加したと過去形なんだよね。

「しかし、君の母親は辞任したがいいのかね？」

「モーマンタイ無問題だよ。これから晶彦がやるうとしている事を知っているからね。」

ちなみに、死亡に関しては1年間の猶予に書き換えて置いたよ」

「そうか。まあ、それくらいなら構わないぞ。どうせ、内部には伝わらんし、実際に死ぬかもしれないのだからな。だが、おまえ達も参加するなら死ぬぞ？」

「死なないうようナーヴギアを改良したから平均だ。まあ、上手いってるかは、わかんないけどね」

施した内容が原作で茅場晶彦が行った事と一緒にだからね。

「ならば良い。それでは、明日……………アインクラッドで会おう」  
「了解」

ソードアート・オンライン（Sword Art Online）をログアウトしたボクは、義母さんに書き置きと新薬やOSなどのデータを作ってからお風呂に詩乃と共に入った。当然、洗いっこしたよ。

次の日の3時調度、詩乃と手を握りながらデスゲームにログインした。

「キャラクターネームはren、生別は男……………少しの間だけだから、厳つくしておこう……………いな、ランダムだ！」

容姿を設定した後、普通は装備の選択に入る。

原作とは違い、武器を最初を選ぶんだよ。

だが、ボクはランダムを選択したのでそのままだ。

さて、《はしまりの街》に入ったボクは、ステータスを開いて装備を確認する。

NAME:ren

LEVEL:1

筋力:1

敏捷：1

装備

スモールソード

白い麻のシャツ

白い麻のズボン

灰色の厚布ベスト

灰色の厚布シューズ

「片手剣か〜」

装備は問題無いね。

問題は、容姿だよ！

自分の容姿のまま女性になってるんですけど？

あれ、特に問題……………ちゃんと言だから、問題無いや。

「さて、待ち合わせ場所に行くか〜」

復習をしておこうかな。

このゲームは、ソードアート・オンライン（Sword Art Online）略称はSAO。

真の仮想世界を構築するナーヴギアの性能を生かした世界初のVR MMORPG（仮想大規模オンラインロールプレイングゲーム）。ユーザーの期待と渴望をうけ、初期出荷分1万本は瞬時に完売した。自らの体を動かし戦う、というナーヴギアのシステムを最大限体感させるため、魔法の要素を排し、代わりにソードスキルという必殺技と、これを使うための様々な武器類が数多く設定されている。また鍛冶や裁縫、釣りや料理、音楽など戦闘用以外のスキルも多数用意され、ゲーム内で生活することができる。

ゲームの舞台は石と鉄で構成され、全百層からなる巨大な浮遊城ア

インクラッド。内部には都市や村、森や湖などが存在する。上下のフロアをつなぐ階段は各層一つのみ、その全てが怪物のうろつくダンジョンに存在し、階段の直前には強力なボスモンスターが立ちだかっている。

通貨単位は《コル》となっている。

ゲームの開始位置はここ、はじまりの街だよ。

「お兄ちゃん、こっち!」

声を掛けて来たのは、明るい水色の髪をした美少女。

「待たせちゃった?」

「うっん、今調度ここに転送されたんだ」

そう言いながら、支給された初期武器の火縄銃を確認する詩乃…

……いや、シノンだね。

「武器は問題無い?」

「うん」

「なら、弾丸と回復アイテム買って《ホルンカ》の村に行こう」

「OK。でも、初期所持金じゃ銃弾は余り買えないけどいいの?」

「ボクのお金も合わせるから、問題無いよ」

初期コルは1200で、弾丸は一発100コルだから12発しか買えない。

まあ、24発2000コルで売ってるけどね。

「すみません、ちょっといいですか？」

現れたのは深紅の瞳と金色の髪をツインテールにした大人の女性。

「何？」

無表情でクールに対応するシノンに、ちょっと怖がりながらも、聞いてくる女性。

「ゲーム初めてなので、出来たらパーティ組んで教えて欲しいなって……………」

女性にカーソルを合わせてみると、表示されたのはsirikaの文字……………原作キャラか。

「嫌」

「そうですね……………」

「いいよ」

「「え？」」

シリカちゃんを見捨てる？  
そんな事が出来る訳が無い。

「お兄ちゃん？」

「ただし、スパルタだから。それでいいなら一緒に行こう」

「よろしくお願いします！」

「まあ、お兄ちゃんがいいなら別にいいかな」

シノンも納得したので、銃弾とシリカの防具を購入して、残りのお金をポーシヨンと毒消しに全て使った。

シリカを加えたボク達は、はじまりの街の北西ゲートから出て、草原をひたすら走って突っ切る。《フレンジーボア》というイノシシが出現する。

それに、ボクが、ただの抜き撃ちソードスキル《スラント》で一撃いれてからシリカを前に出す。

「あつ、あの……………怖いですっ！」

「ダガーを構えて、スラントって言いながら、ダガーを抜いたらソードスキルが発動する」

「す、スラント！」

シリカがシノンに無視されつつも、シノンの助言通りにやるが、ただがむしゃらにやってるだけなので、録に発動しないし、被弾も増えている。

「はい、時間切れ」

ボクはイノシシの目にスモールソードを斜めに突き刺し、脳を破壊する。

このゲームは弱点が色々設定されているから、知っていれば簡単だ。

「あう……………」

「シリカは、しばらくモーシヨンの練習と見学だね」

「はい……………すみません……………」

「ほら、行くよ」

シノンがシリカを引っ張って先に行った。

それから、何度かシリカの練習をやりながらホルンカの村に着いた。

「クエスト行くよ」

「はい(うん)」

ホルンカ村の奥にある民間に入ると、台所で鍋をかき回していたいかにも《村のおかみさん》といった感じのNPCノンプレイヤーキャラクターがこちらを見て言った。

「こんばんは、旅の剣士さん達。お疲れでしょうから、食事を差し上げたいけれど、今は剣何も無いの。出せるのは、一杯のお水くら

「いのものよ」

「……それでいいです」「」

システムが認識出来るように、ハッキリと三人で発音した。

「どうぞ」

「……ありがとうございます」「」

水を飲みながら、シリカにレクチャーしていると、隣の部屋から小さな子供が咳込んでる声が聞こえると、おかみさんが肩を落とし、数秒するとクエストの証である金色のクエストチョンマークが出現した。

「これがクエストの合図なんですね」

「うん」

「何かお困り事でもあるんですか？」

定番のセリフを言うと、おかみさんは身振り手振りで伝えてくる。内容は簡単で、娘を助ける為に滅多に出ない植物モンスターからはいしゅというアイテムを取って来てくれという内容だ。

その代わりに、報酬として《アニールブレイド》という、初期にしては強力な剣をくれる。

「……任せてください！」「」

クエストを受けると《？》が、進行中を現す《！》になったので、

ボク達は外に出て、村の奥へと行き、村で1番大きな家に入る。  
そこには、いかにも村長ですという御老人がいて、お茶を飲んで  
いる。

「「こんばんは」」

「おや、旅人さんか……………どうじゃ、わしの話を聞いていかんか  
ね？」

椅子を進められたので、座って話を進める。

「「聞かせてください」」

クエストが始まり、御老人が喋りだしたら、シノンが椅子に座つ  
たまま瞑想しだす。

「あの、聞かないんですか？」

「シリカ、時間が勿体ないんだよ。だから、修業するよ」

「はい……………？」

理解していないシリカを放置して、進める。

「まず、ステータスからスキルスロットを選んで、体術のスキルと  
短剣のスキルを習得して」

「分かりました」

理解して無くても、大人しく従って短剣と体術のスキルを覚えた

シリカを確認したら、立ち上がらせて殴りつける。

「きゃっ！ 何をするんですか!？」

「修業。ちなみに、村の中はシステム保護があるから平気だよ。ボクの攻撃に中ら無いように避けて反撃するように……………もちろん、短剣装備してソードスキルは有りだよ」

「やっつみます」

シリカは素直に従ってくれるから楽だね。

「やっ！たあっ！」

シリカの攻撃を左右に避けたり、流して防いだりしながら攻撃する。

「ほら、身体全体を使って戦うんだよ。これはゲームであってゲームじゃない。基本的に現実の身体を使っているとと思うほうがいいよ」

「はい！ なら、身体全体を使って……………」

身体をバネの様に使いだしたシリカは、かなりの速度の乗った攻撃をしてくるようになった。

30分後、ようやく御老人の話は終わった。

「そうじゃ、御主達旅人に頼みたい事があったんじゃ」

「なんですか？」

「私達でよければ、お手伝いしますよ」

「ありがたいのう」

クエストマーク《？》が出現した。

出現条件は、30分間、御老人の無駄話に付き合う事。

「お願いしたい事は、村の近くに出現する《リトルネペント》30体が《ラージネペント》30体を狩って来てほしいのじゃ。」  
「やつらが出現してから、狩りも大変で困っておるのじゃ」

「「「分かりました」」」

三人で返事をしてクエストを受けた後、村長の家を出た時にシリカが発した言葉はひとつ。

「長かったですね」

「「ああ（うん）」」

心の底からボク達の思いは一緒だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2266z/>

---

ステラになってSAOで大暴れ！

2011年12月8日01時50分発行